富山大学広報誌 ―――― トムズプレス
ISSN 1880-6678

TOM'S PRESS

WINTER 2014
VOL. 27

特集

つなげる、つながる。

◎ 富山まちなか研究室 MAG.net
◎ エコチル調査
◎ 高岡まちっこプロジェクト
◎ つままプロジェクト

大学情報｜研究者紹介｜ハロー先輩｜Tom's History｜Tom's 薬箱｜Tom's Gallery

つなげる、つながる。

まちと人との結び付きが、次世代への架け橋。

地域との連携が魅せる可能性

近年、富山大学では、地域に密着した様々なプロジェクトを実行している。地域と連携し交流を深めることで、学生ひとりひとりの感性を養い、社会に貢献できる人材を育成している。同時に、地域住民や地元企業と協働し、社会に寄与する活動へとつながっている。学生の成長とともに地域の発展へと結びつく。それが「つなげる、つながる。」ということ。

CASE 1 富山のまちを、もっとドキドキさせる！

富山まちなか研究室MAG.net

大学生ならではのアイデアとパワーでまちづくりに貢献している「富山まちなか研究室MAG.net」。交流スペースとして地元商店街との交流を深めていく。

CASE 2 子どもの健康と環境に関する全国調査

エコチル調査

将来の子どもたちが安心して暮らせる環境を目指し、「エコチル調査」として、化学物質を中心とした環境要因と子どもの成長との関わりを徹底調査。

CASE 3 新しい「高岡での暮らし方」を発信！

高岡まちっこプロジェクト

空き家に「高岡らしさ」を吹き込みシェアハウスとして再生させる「高岡まちっこプロジェクト」で、「ものづくりのまち」高岡の地域活性化を目指す！

CASE 4 デザインから、まちを豊かに彩る！

つままプロジェクト

次世代の地域文化とクリエイティブ産業を担う地域連携教育「つままプロジェクト」で、「文化の作り手」として未来を見つめる人材を育成。

CASE 1

人の熱を
まちの中へ

大学生ならではのアイデアとパワーが、まちにエネルギーを注ぐ。富山のまちを、もっとドキドキさせる！

だれでもまちづくりに参加できる交流スペース。

学生とまちなかをつなぎ、中心市街地の活性化を目指す。そんなコンセプトのもと、2011年7月に富山市がオープンした富山市総曲輪の『富山まちなか研究室MAG.net』。「磁石のように人を引き付ける存在となり、この場所を拠点として新たなネットワークを広げたい」。そうした期待を込めて学生たちによって命名されたこのフリースペースでは、現在も様々な学生団体やまちづくりサークルがアイデアを持ち寄り、商店街との交流を図りながら意見を交換し合っている。ひとつの机を囲みながら学生たちが議論する。ガラス張りの建物から見えるこの光景は、いまや総曲輪通りの象徴。内装やペイントを芸術文化学部の学生らが担当するなど、富山大学の学生も開設当初から関わっており、『富山まちなか研究室MAG.net』を拠点に市内の学生が中心となって活動を続ける『街なかメイクアップサポーター（通称・街アップ）』も、まちのにぎわいを創出する新たなコミュニティとして注目されている。また、まちづくり団体の活動拠点としてはもちろん、共通の趣味や話題を語り合えるたまり場や、研究成果の発表やワークショップといったイベント開催ができる場としても開放。それぞれの想いが自然なカタチで地域への貢献へとつながる。そんなフリースペースなのである。

学生ならではの目線で市街地の情報を発信！

園児らと一緒になって壮大な『まちなかおえかきプロジェクト』を実行するなど、学生ならではの視点で活動を続けている『街なかメイクアップサポーター』。また、『MAG.net的インターン生活』では、企業や店舗からまちづくりに関するミッションを受けた学生が、長期間に渡ってそれを遂行していく実習プログラムも実施している。

〈主な活動〉

●街なかメイクアップサポーター

富山まちなか研究室MAG.netを拠点に活動する学生団体。市街地を紹介するマップも発行。

●MAG.net的インターン生活

まちづくりに関するミッションを遂行していく、長期型実習プログラム。

富大生ならではの目線で！
富山のまちをこんな感じにしたい！

手嶋直人さん（経済学部3年）　菊川ありささん（芸術文化学部3年）　中西巧さん（人文学部3年）

Example of Activity

学生まちづくりコンペティション

テーマは学生によるまちなかの「楽しい・おしゃれ・おいしい」の演出。ユニークかつ斬新なアイデアが満載。県内外から参加した19チームによる熱きプレゼン大会の模様をお伝えします。

まちづくりに対する熱い想いを込めて…。

2013年7月に富山国際会議場で開催された『学生まちづくりコンペティション』。まちなかで魅力的なイベントを実施する「まちなか演出部門」と、食や物などの商品を企画する「商品企画部門」の2部門で行われた同コンペには、公募によって県内外19のチームが集まり、学生たちが採択に向けて凌ぎを削り合った。公開プレゼンテーション後に審査が行われ、見事採択された事業には補助金を交付。現在、各企業や商店街と連携して開発された商品が複数完成し、市街地ではトリックアートなどのイベントも実施されている。

●事業実施までの流れ

参加希望の学生が多数集結。ここでの出会いが将来へとつながるはず。

提案内容の相談。応募の説明や連携企業の紹介などの会合が『富山まちなか研究室 MAG.net』で行われた。

事業実施に向け、提案内容発表会でサポートメンバーを募る。

富大生が発案した広告型ルーズリーフ『MACHI PAD』。優秀賞を受賞！

採択が決まったら、富山市からの補助金を元に実施へ動き出す。

日本全国から19チームが参加。

プレゼンの持ち時間は1チーム5分。どれだけ想いを伝えられるかが鍵になってくる。

プレゼン後には質疑応答も。企画の可能性を学生と企業（商店街）が一緒になって模索する。

当日の様子

当日は高校生や大学生、商店街関係者などが多数参加。それぞれがまちへの想いを熱く語り、学生ならではの感性を活かしたアイデアを披露。学生たちの熱気に押されてか、当初の予定を大幅に上回る数の事業が採択された。

VOICE from 富大生

まちづくりに興味のある人やおもしろい発想を持った人たち。そんな学生同士のネットワークが広がる場として『富山まちなか研究室MAG.net』に魅力を感じています。今回参加した『学生まちづくりコンペティション』の活動場所としても利用させてもらい、企業や商店街の人たちと接する機会も増えました。そうしたつながりは卒業してからも大切にしていきたいと思っています。（富山大学経済学部3年・小山内将宏さん）

VOICE from 商工会議所青年部

『富山まちなか研究室MAG.net』の開設によって、まちなかと学生につながりが生まれたのは我々にとっても大きな収穫でした。学生たちの柔らかい頭で考えられた企画によって、まちなかをどんどん元気にしてもらう。『学生まちづくりコンペティション』もそうした活動の一環なんです。まちなかに学生さんのアイデアが溢れるよう、これからもサポートをしていきたいですね。（富山市商工会議所青年部・長森稔さん）

学生のチカラによってまちを動かす。それが『富山まちなか研究室MAG.net』が一番に考えていること。情報や知識、そして人と出会える場所として、これからも開放され続けていく…。

気になったら早速行ってみよう！
富山まちなか研究室MAG.net／富山市総曲輪3丁目3番14号（総曲輪通り）▶

CASE 2

未来へ託す永き探求

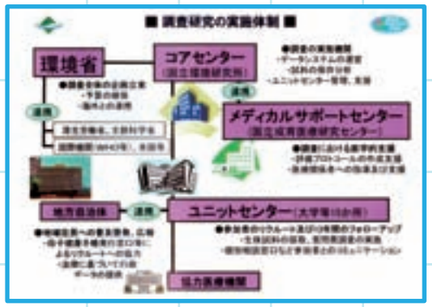
将来の子どもたちが安心して暮らせる環境を目指して…。子どもの健康と環境に関する全国調査

化学物質を中心とした環境要因と子どもの成長との関わりを調査する。

エコチル富山ユニットセンター長
富山大学医学部公衆衛生学　稲寺 秀邦教授

「エコチル調査」とは「子どもの健康と環境に関する全国調査」の愛称。エコロジーのエコと、チルドレンのチルを短縮して作られた造語になっている。子どもたちの健康や成長に、周りの化学物質を中心とした環境要因がどのように関わっているのかを知るためのもので、全国各地で10万人の妊婦さんを対象に行い、生まれてきた子どもが小学校を卒業する13歳に達するまでの13年間、定期的に子どもの健康状態を調査していく。調査研究の実施体制として、環境省が全体の企画立案を行い、コアセンターの国立環境研究所の中のデータシステムに10万人のデータを登録し解析をしていく。

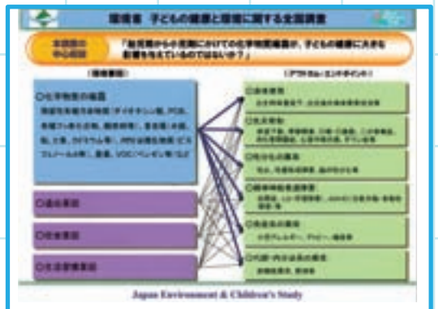
実際に「エコチル調査」を実施していくのは、全国15ヶ所にあるユニットセンターで、北陸エリアでは「エコチルとやま」と称して、富山市・滑川市・魚津市・黒部市・入善町・朝日町に住んでいる人を対象に、富山大学が共同研究機関となってリクルート活動やフォローアップを行っている。参加登録は平成26年の3月までで、富山ユニットでは5700人の登録を目指している。



「エコチル調査」で見えてくる安全で安心な子育て環境への道筋。

エコチル富山ユニットセンター長、富山大学医学部公衆衛生学の稲寺秀邦教授は「エコチル調査」について、「エコチル調査の中心仮説は、胎児期から小児期にかけて、化学物質に接することが子どもに影響を与えているのではないか？というものです。現在、子どもの間にいろいろな疾患が増えています。身体発育の異常、精神神経発達障害、免疫系の異常、代謝・内分泌系の異常といったさまざまな結果が挙がっています。アトピーやアレルギー、ぜんそくなどの発生率が低い疾病についても解析できるからです。

息が子どもの間で増えていることや、生まれてくる子どもの出産時の体重が低下してきているというデータもあります。この原因として、遺伝要因、社会要因、生活習慣要因以外に、化学物質に接すること等の環境要因が疑われています」と語る。日本の子どもの健康に化学物質が影響しているのでは…この仮説を検証する目的で、今回の大規模なコホート研究「エコチル調査」は実施されている。



Example of Activity

「エコチル調査」で快適ライフを

「エコチル調査」に参加することで、未来の子どもたちが安心して生活できる環境を築く以外にも、様々なメリットがあります。定期的なイベントや、疑問・質問など、登録する上で必要な情報をお伝えします。

「エコチル調査」のギモン・シッモン

Q なぜ全国で10万人も必要なの？

A 10万人を調査することで、ダウン症などの発生率が低い疾病についても解析できるからです。

Q 13年間も調査するのはどうして？

A 多くの病気は長い時間を経てから発症します。生まれた直後は健康でも、幼稚園・小学校で明らかになる場合があるからです。

Q「エコチル調査」終了後の社会は？

A アトピー性皮膚炎の原因や自閉症の原因が明らかになっているかもしれません。また、子どもが親になるとき、安心してその子どもが子育てできる環境を手渡すことができます。

「エコチル調査」に参加するメリット

- 子どもたちのためにより良い未来と環境をつくる
- 子育てに役立つニュースレターを定期的に送付
- コールセンターにて365日、問い合わせや育児・医療相談が可能
- 血液・尿検査の結果のお知らせ
- 定期的に子どもの成長状態を把握できる
- エコチル富山ユニットセンターが開催するイベントへの参加

エコチル富山ユニットセンター開催イベント

クッキングセミナー

今までに4回開催。離乳食のメニューの試食や、管理栄養士による離乳食や幼児食のお話会を開催。

第3回エコチルクッキングセミナーより

ママ&キッズの集い

親子一緒になって、仲良くフィットネスをしたり、ピアノに合わせてリトミック体験を行ったりと、親子で楽しめる集いを開催。

エコチルママ&キッズの集いin入善町より

今後もいろんなイベントを定期的に開催します！

エコチルとやまプレゼンツ セントラムdeゴー！トレジャーハンティング

セントラムに乗って、街の中に隠されたトレジャーワードを探し出し、豪華商品をゲットする企画。子どもはセントラム乗車が無料に。

「エコチル調査」参加登録について

子どもたちの健康や成長に、周りの化学物質を中心とした環境要因がどのように関わっているのかを知るために、妊婦さんを対象に調査します。

- 対象となる方…お住まいが調査対象地域（富山市、滑川市、魚津市、黒部市、入善町、朝日町）の方／協力医療機関を受診可能な方
- 参加登録…協力医療機関にて行います。／妊娠が確定した時点で登録いただきます。／協力機関については、076-415-8842 までお問い合わせください。
- 募集期間…平成 26 年 3 月まで参加者を募集

- 調査の流れと調査項目
妊娠時・登録…調査内容の説明と参加のお願い、同意書の記入
妊娠中…アンケート調査、お母さんの検診・採血
出産時…お母さんと赤ちゃんの健康状態をチェック、へその緒の血液を採取
その後…アンケート調査、子どもの健康状態をチェック、発育のフォロー

子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）富山ユニットセンター
国立大学法人 富山大学　杉谷キャンパス医学部公衆衛生学講座内
〒930-0194 富山市杉谷 2630 TEL:076-415-8842 FAX:076-415-8843
E-mail : ecojimu@med.u-toyama.ac.jp

協力医療機関から見たエコチル調査の現状

「エコチル調査」は国を挙げて行われる大規模な調査なので、とても価値のある活動だと思います。該当する妊婦さんには、妊婦検診を通し「エコチル調査」のことをお伝えしていますが、参加に同意していただける方が多く、その数は順調に増えています。ただ、今はまだ調査のスタートラインに過ぎません。これから13年間継続して調査を行っていくことが大切なのです。妊婦さんはまとまった時間をつくることが難しく、アンケート調査を受けるのは大変なことです。また食事面や環境面に対して、神経質になり過ぎても身体によくありません。途中で調査をやめてしまうことのないよう、うまく関係性を築きながら、バックアップできる体制をユニットセンターが中心となって整えていくことが大切だと思います。この「エコチル調査」によって、環境と病気の関係性がはっきりしたとしたら、環境問題に対してスムーズに対応することができ、安心できる社会へと繋がっていくことでしょう。

かんすいこうえんレディースクリニック
金枝 貴史 院長

CASE 3

付加価値あるまちづくり

空き家に「高岡らしさ」を吹き込み再生させる、地域活性プロジェクト！

新しい「高岡での暮らし方」を発信！

高岡まちっこプロジェクト実行委員会メンバーとシェアハウスで暮らす学生とのディスカッション

空き家を活用したシェアハウスで若者を街に呼び込む！

加賀藩二代目藩主・前田利長が高岡城を築いて以降、商工業のまちとして発展を遂げてきた城下町高岡。高岡大仏、古城公園などの建造物や、銅器をはじめとする伝統工芸は歴史的に大きな価値を持ち、国が政令する歴史都市にも認定されている。しかしながら近年では少子高齢化に伴い、中心市街地の空き家が増加。老朽化した建物倒壊の危険性などが問題視されている。

そんな中で、高岡市中心部の空き家を活用しようと立ち上げられたのが『高岡まちっこプロジェクト』だ。2年前から計画が進められているこのプロジェクトでは、高岡市の有志が空き家を取得し、富山大学芸術文化学部の学生と共にワークショップを重ねながら、複数人が共有して居住するシェアハウスとして再生。中心部に芸文生をはじめとする若手クリエイターを呼び込み、まちなかの活性化や空き家対策につなげるといった取り組みが行われている。ワークショップでは空き家の活用法を探るために、市内の町家を見学するツアーなどを企画。学生たちそれぞれが「住まい」に対する想いや、シェアハウスに住むことの長所や短所などをディスカッションした。

2013年3月には第一号となるシェアハウスが完成。学生たちのアイデアが詰まったシェアハウスは現在、第三号まで着工されており、ものづくりのまちならではの試みが全国からも注目されている。春には、町家をリフォームしたゲストハウスも完成予定。

シェアハウスの中にアトリエもあるから作業がはかどる！

「おかえりなさい」を言える仲間がいるのが、シェアハウスの良いところ！キッチンも広いから、友だちに料理を振る舞うこともできます。

須藤美来さん
（芸術文化学部1年）

close up

まだまだ広がる可能性「高岡まちっこプロジェクト」

芸文生の声がリアルに反映された家

イベント開催や作品展示によって地域との交流も増加！

富山大学芸術文化学部の学生たちが、ワークショップを通して空き家の再生計画を立てていく。クリエイターの卵でもある芸文生たちと一体になって、まちを盛り上げていこうというのが『高岡まちっこプロジェクト』の目的のひとつ。

完成した第一号のシェアハウスには大きなアトリエがあり、一階のカフェ『merry＊smile cafe』には、学生らが手がけた作品を展示するギャラリーが併設されるなど、芸文生ならではのアイデアが多く採用されている。ほかにも、空き家めぐりツアーや蚤(のみ)の市など、空き家の再生を通じた数々のイベントが地域活性にもつながっている。

Example of Activity

空き家を活用したシェアハウスの運用、高岡のまちを歩きながら町家をめぐるツアーなどなど。地域と学生を結び付ける『高岡まちっこプロジェクト』の活動内容とは？

シェアハウス
学生たちのアイデアが盛り込まれたシェアハウス。リビングは大人数で団らんできる広さ。アトリエも併設。

カフェ
一階はギャラリーが併設されたおしゃれなカフェ。学生がレシピを考えた料理もいくつか提供されている。

空き家巡りツアー
高岡のまちなかを歩きながら、空き家の活用法を探る「空き家めぐりツアー」。地域交流として多くの人が参加。

ゲストハウス
現在、町家をリフォームしたゲストハウスを建設中。観光客が町家暮らしを体験できる拠点として運営予定。

蚤(のみ)の市
空き家を大掃除した際に出てきた器や洋服などが出品される蚤(のみ)の市も開催。なかなか手に入りにくい珍品も。

VOICE from プランナー

アイトラム（万葉線）をはじめとする公共交通の利用を、なんとかして促進させよう。そうした取り組みの中で始まったのが『高岡まちっこプロジェクト』でした。利用する人が少ないのにはワケがある。まちをもっと魅力的にして、人が集まるようにするのが先決なのではないか。また、高岡の中心部で増加傾向にある空き家を活用することで、若者たちが増え、まちが抱えている様々な問題を解決することはできないか。そうした経緯が、今現在の活動の根本になっています。そのうえで最も大切だったのが若者の力。ここ「ものづくりのまち」高岡には芸文生をはじめ、クリエイティブな人材がたくさんいる。高岡の宝でもある彼らの力を借りないわけにはいかないと思ったんです。高岡のまちとアイトラム、そして若い世代が一体となったまちづくり。最終的にはこのプロジェクトがもっと多くの人たちの、まち全体と学生たちによるプロジェクトとして盛り上がっていく必要があると思っています。（高岡まちっこプロジェクト実行委員・荒井里江さん）

次世代を担う、若い学生やクリエイターが集まるまちにしたい…「ものづくりのまち」高岡、発展プロジェクト実行中！

CASE 4

キャンバスは
まちそのもの

次世代の地域文化とクリエイティブ産業を担うプロのタマゴが考える。

デザインから、まちを豊かに彩る！

”文化の作り手“として未来を見つめる人材を育成する。

富山大学芸術文化学部では、社会と連携して、伝統産業が盛んな高岡市を中心とした地域の活性化につながる実践的な教育を行っている。平成23年度特別経費による事業「芸術文化を起点とした実践的教育モデルの構築」を起案し、学内公募で決まった「つまま」プロジェクトと称して、次世代のクリエイティブ産業を振興するスペシャリストの育成に取り組む。「つまま」とは、成長すると15mほどにもなる巨木（タブノキ）のことで、芸術文化学部のある高岡キャンパスの中庭にも植えられている。学生が「つまま」のようにしっかりと根を張り大きく育つ願いを込めて「つまま」プロジェクトと名付けられた。

地域連携教育をモットーに、「新時代を担うアーティスト」「新たな地域文化のリーダー」「クリエイティブ産業のコーディネーター」を養成するもので、地域交流を通じて豊かな感受性を養いながら、実社会に即したコミュニケーション能力を身につけるとともに、地域文化の活性化に貢献することを目指している。

行政や企業、地元住民組織などと連携し、実践的に活動を行うことで、高岡市全体がキャンパスとなり、伝統芸術を肌で感じながらリアルな創造性を学ぶことができる。全国的に見てもここまで地域と密着し、伝統産業を学べる場所はあまり聞かない。学生たちは、この地域連携教育の場で培った技術や感性を活かして、これからも「文化の作り手」として活動していく。

実践的に行なっている多彩なプロジェクト

●地域と連携したイベント

高岡市金屋町全体での生活空間内展示「金屋町ｉｎさまのこ」をはじめ、地域と連携した数々のイベントを実施。

●海外大学との提携

タイやスウェーデン、チェコなど世界各国の大学と提携し、世界の視点で日本を見直す場を提供。

●地域とのものづくり連携

地域と連携しながら実践的なカリキュラムを行うことで、社会の即戦力になる能力を身につけることが可能。

●芸文ギャラリー

制作活動の場として産官学で設置されたギャラリー。地域の企業や職人との交流やコミュニティの場として活用。

Example of Activity ＼高岡市全体がクラフト会場！／

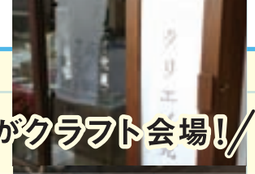
高岡クラフト市場街

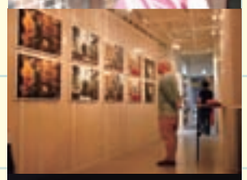
工芸都市のまち並みと高岡クラフトが融合

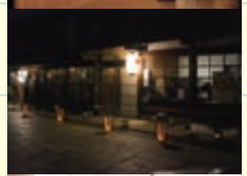
「高岡クラフト市場街」では、高岡クラフトコンペでの入賞作品や全国のクラフト作家、高岡地場産業メーカーによる作品展示・ショップ、そして食とクラフトがコラボした体感できるスポットなど、クラフトを通してまち全体で楽しめるイベントを、平成25年10月3日から7日までの5日間開催。風情豊かな高岡市中心市街地にある25ヶ所の会場を歩きながら、高岡のクラフトシーンを肌で感じることができ、地元民や観光客で大いに盛り上がった。富山大学芸術文化学部と高岡市役所、高岡伝統産業青年会など高岡市中心市街地が一体となり、工芸都市ならではの「市場街」が催された。

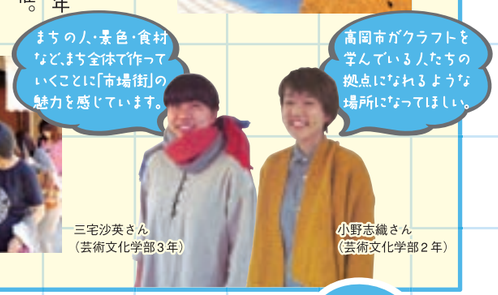
まち歩きとクラフトを同時に楽しめるよう、高岡市市街地を中心に25ヶ所の会場で開催。

- ●工芸都市高岡 2013 クラフト展
- ●クラフトの台所
- ●作家の引き出し展
- ●たかおかローカルキッチン
- ●高岡ファクトリークラフトショップ
- ●高岡クラフツーリズモ
- ●クラフトマンズ ギャザリング
- ●クリエイ党展
- ●木樽と土釜の仕事
- ●まち歩きワークショップ
- ●富山ガラスのうつわ展
- ●同時開催 関連イベントも









三宅沙英さん（芸術文化学部３年）

小野志織さん（芸術文化学部２年）

VOICE from 高岡市役所

「高岡クラフト市場街」は、高岡市と大学との連携事業として市が協力しているもので、芸術文化学部の松原教授が中心となって行われました。高岡を象徴する「ものづくり」と「食文化」をまちなかで伝える場として、とても大きな効果が期待できる事業になりました。今後も大学や伝統産業青年会と連携しながら、伝統産業の振興や地産地消による地域活性化を進めていきたいと考えています。（高岡市役所産業振興部産業企画課　主査・日野利さん）

VOICE from 高岡伝統産業青年会

7年ほど前に富山大学から、高岡伝統産業青年会と富山大学芸術文化学部の学生との産学連携で「ものづくりをテーマに事業を行わないか？」と声を掛けられたのがきっかけ。これが現在の「ものづくり」によるさまざまな地域活性化プロジェクトに繋がっていると思います。「高岡クラフト市場街」のような、サテライト事業を拡大していく動きをはじめ、今後も協力し合いながら、高岡市全体を盛り上げていきたいです。（高岡伝統産業青年会会長・折橋祐紀さん）

学校・行政・企業・地元住民が「ものづくり」を通して連携していくことで、地域文化の活性化へと繋がっていく。

TOYAMA UNIVERSITY INFORMATION

大学情報

NEWS & TOPIC

2013 10/16 第6回富山ビジネスプランコンテストを開催

2013 10/19&26 ホームカミングデイを開催

▲医学部

▲芸術文化学部

2013 10/24 富山大学和漢医薬学総合研究所創設50周年記念式典・記念講演会を開催

富山国際会議場において記念式典・記念講演会が開催され、講演会では和漢医薬学総合研究所の各分野の先生が講演を行いました。

2013 10/26&27 薬剤師体験型学習を開催

2013 10/30 富山大学環境塾を開催

「PM2.5と大気環境について考える」というテーマの下、外部講師の基調講演やパネルディスカッションが行われました。

3CAMPUS 大学祭 テーマ「Engine」

富大祭 10月12日&13日〈五福キャンパス〉

医学薬学祭 10月25日～27日〈杉谷キャンパス〉

創己祭 10月19日&20日〈高岡キャンパス〉

2013 11/2&3 富山大学スマイルフェスティバル2013を開催

2日間で4000人を超える子どもたち・親子連れが来場しました。キャンパス内に設置された各コーナーは大いに賑わい、スタッフの学生達も参加者と一緒に2日間を楽しみました。

2013 11/7 富山県と富山大学との連携推進会議を開催

2013 11/22 男女共同参画推進シンポジウムを開催

2013 12/13 平成25年度インキュベータ交流事業・富山市起業家応援プロジェクトを開催

CALENDAR

後学期授業

五福 高岡 1月7日(火)～2月3日(月)

杉谷 1月6日(月)～2月3日(月)

※大学入試センター試験準備のため1月17日(金)は全キャンパス休講

補講・試験

五福 高岡 2月4日(火)～10日(月)

杉谷 2月4日(火)～17日(月)

春季休業

五福 高岡 2月11日(火)～3月31日(月)

杉谷 2月18日(火)～3月31日(月)

学位記授与式(3月期)

全キャンパス 3月21日(金)

学位記授与式(3月期)

毎年、富山市総合体育館において挙行されています。昨年度は学部の卒業生や大学院の修了生など、計2182名が学位記を授与され、新しい一歩を踏み出しました。

▲学位記授与式(昨年の様子)

series シリーズ 研究者紹介

真摯に古典の原文と向き合うことが大切

古典作品固有の魅力を追求し原文を解釈していく

人文学部
東アジア言語文化講座 教授
田村 俊介(たむら しゅんすけ)

2005

2005年、田村教授自らが撮影。

古文に興味を持ちはじめたのは高校生の頃。ほとんどの生徒が英語を中心に勤しむ中、田村教授は古典の世界へと邁進していくようになる。周囲から「どうして"死んだ学問"の古文に力を入れるのか?」と疑問視されたこともあるという。「当時の英語の先生がとても生徒に人気がありまして、大勢の生徒は英語の勉強に力を入れていました。その反面、古文はあまり人気がなく、進んで勉強する生徒が少なかったので、古文だけは一番になれました」と田村教授。また「確かに古文は現在では使われていない言葉なので、周囲が"死んだ学問"と言うのは分からなくはありません。ただ、その昔に使われていた言葉を忠実に追求していくことで、歴史背景から登場人物の性格や思想を理解していくことができます。原文の解釈に力を注ぐことで、現在の生活に応用したり、現代人の価値観を相対化したりすることができるのです。言わば、古典に書いてあることは、現代においては全て正しいという認識をするのではなく、現代にとってこれは誤っているという感覚をむしろ持っていただきたいです。古典に綴られている考えを反面教師として、現代と古文を繋げていってほしいです」と語ってくれた。

古典を忠実に解釈することで見えてくるものがある

田村教授は現在、人文学部の中で日本中世文学をメインに研究をされている。大学一年生の頃に3ヶ月を掛けて『源氏物語』を通読した。最初は理解不十分だったが、何度も通読を繰り返すうちに、登場人物の性格や紫式部の筆法が分かるようになり、それ以降、『源氏物語』をはじめ平安文学の研究に勤しんだ。平成十七年に、平安文学を専門とした、教育学部(現・人間発達科学部)の呉羽教授が人文学部へ赴任された際に、専攻を中世文学に変更。現在は『義経記』を中心に研究をされているが、作品固有の魅力を追求するため、原文の解釈に力を注ぐ姿勢は昔から変わらない。平成24年には『秋月物語』の研究を発表し、"『平家物語』の投影とそれを前提とした解釈の試み"を論じた。「『秋月物語』を研究し発表している人は今までに3、4人しかいません。だから、私は『秋月物語』の研究者として5本の指に入りますね」と冗談交じりで話してくれた。

田村教授が研究している『義経記』は全八巻あり、岩波書店発行『日本古典文学大系　義経記』(略称は大系)と小学館発行『新編日本古典文学全集　義経記』(略称は新全集)の2つが有名である。巻一から巻六までと、巻八に関しては後者が善本であり、巻七に関しては前者が善本と佐藤陸氏『義経記と後期物語』(双文社出版、1999年)が述べており、田村教授も支持している。第七巻は越中の国で、義経と弁慶が如意の渡を通る箇所である。山伏集団のリーダーに扮する弁慶が、如意の渡し舟に乗るために、若い山伏に扮した義経を厳しく扇でたたく。渡し守の平権守はその状況の辛さに舟に乗ることを許す。さらに弁慶から船賃代わりの着物を強引に取り立てる。新全集でのやりとりでは船賃として着物を頂いたままになっているが、大系の本文に基づくとその着物を義経に返している。「この2つの『義経記』の巻七では、権守という越中人の人柄に大きな差異が出てきます。それは2つの原文を忠実に解釈していくことで、理解していくことができます。大系の本文に基づくならば、越中人は強き(弁慶)を挫き、弱き(義経)を助く精神。新全集の本文に基づくならば、越中人はがめつい性格であるということ。私は強きを挫き、弱きを助く越中人気質を伝える大系の本文のほうが善本であると思っています」と。古典を忠実に解釈していくことで、見えてくる世界が広がっていくことを、田村教授は我々に教えてくれた。

2013

2013年現在、橋が架けられ、渡し船は運航されていない。

ハロー先輩 Hello!

Voice of Graduate from TOYAMA UNIVERSITY

人との関わりが、未来の自己の礎に。

Miyuki Tsuji

辻 美由貴さん

●勤 務 先／社会福祉法人
立山町社会福祉協議会
●卒業年月／平成 20 年 3 月
●専攻課程／教育学部 生涯教育課程
発達臨床専攻

私は今、立山町社会福祉協議会で仕事をしています。社会福祉協議会は、地域福祉の推進を使命としていて、私は主に地域の福祉活動の支援や相談事業を担当しています。

この仕事を選ぶきっかけは卒業研究でした。育児ストレスと愛着等の関連をテーマとしましたが、自分なりに納得する所まで至らず、質問紙調査で深く知ることとなった子育てサロン等の福祉活動を通して、卒業後も実践に取り組みたいと思ったからです。初めは、授業で学んだ臨床心理学や相談援助技術は、直接仕事に活かされないのではと思っていました。しかし、就職後に社会福祉士資格を取得し、様々な仕事を任せてもらえるようになってから、大学時代に得た知識や経験がとても重要なものだったと実感しています。

昨年担当した地域福祉活動計画づくりでは、人間発達科学部発達教育学科 野田秀孝准教授にご指導頂き、平成25年度から5年間の活動方針を策定することができました。未熟な身ですが、これからも自分のできる限りの力で仕事に取り組みたいと思っています。

最後に、在学時に取り組んだスマイルフェスティバルなどのボランティア活動を振り返って、学生の皆さんへのエールとします。仲間と協力したり、対外的に説明したりと、思いを形にするために必要な"人との関わり方"の体験は必ず仕事に活きてきます。学生の皆さんには、多様な人と出会い、新たな体験を楽しむことができる大学時代を、貴重な研鑽の場としていろいろなことに挑戦してほしいと思います。

助け合い、支え合い、学び合い。

Shino Sone

曽根 志穂さん

●勤 務 先／公立大学法人 石川県立
看護大学 看護学部
地域･在宅･精神看護学講座
地域看護学 助教
●卒業年月／平成 9 年 3 月
●専攻課程／大学院医学系研究科(修士
課程) 平成11年3月 修了

旧富山医科薬科大学医学部看護学科の第1期生として入学して、もう20年が過ぎました。1期生なので当然、先輩がいない、先生方も少ない、講義室や実習室も十分ではないなど完全ではない状態で学び続けた学生生活でした。それでも、友人同士で助け合い、支え合い、学び合い、看護学科の先生方はもちろん、医学科の先生方にもたくさん教えていただき、自分達の力で身も心もたくましく成長する日々を過ごしていました。当時、出会った友人や先生方、実習でお世話になった患者さんや指導者さんのことは今でも鮮明に思い出され、今も人と関わる仕事ができる喜びにつながっています。

大学院終了後、富山県内の自治体で保健師として働いた後、現職に就いていますが、職場にはたくさん富山医薬大看護学科卒の教員がいるので、心強く感じています。今は主に、講義や演習のサポートと地域看護学実習の臨地指導、研究活動や大学運営業務を行なっていますが、小規模の単科大学なので教員、学生一人ひとりの顔が見えるので、学生と一緒に勉強したり、課外活動をしたりと楽しんでいます。

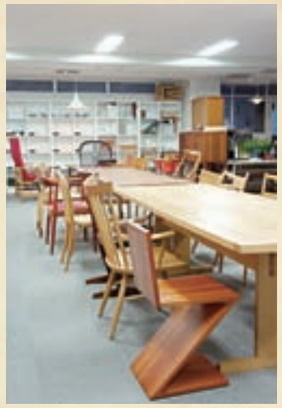
平成23年5月に東日本大震災の被災地への保健師等派遣支援活動に保健師として参加しました。久々に保健活動を行なう中で、様々な苦労を背負い生活している人々の姿や懸命に住民のために働く現地保健師の姿を見て、何か力になりたいと思いつつも自分の無力さを痛感しました。その後、本学の学生有志による被災地学生ボランティア活動が立ち上がり、現地活動のコーディネートや活動のサポートを行ないながら、現地に継続的に行っています。ボランティア活動での学生達の純粋で素直な気持ちと真摯な態度には感激するばかりで、このような経験が将来社会人としての自信につながると感じています。

学生のみなさん、学生時代にはいろんな経験をして、今学んでいる専攻学を生かしつつ、誇りにしつつ、でもそれにとらわれず、幅広い世界での活躍を期待します!!

TOM'S HISTORY 「使う」教育環境

芸術文化学部には、コミュニケーションセンターという場所があります。様々な打合せに使用する場所として、本学が再編統合された平成17年に整備されました。この再編統合を契機に、これからさらに開かれた学部を目指すという意志を込めて、壁面はガラス張りとなっており、とても明るい開放的な空間です。

ガラス越しに部屋の中を見ると、様々なかたちの椅子が並んでいます。これらの椅子は、いわゆる「名作椅子」と呼ばれ、世界に認められる優れた椅子を、ものづくりを学ぶ大学の教材として収集してきたものです。一般的には資料として箱に入れられ保管されることもある椅子ですが、本学部では、価値を生み出す「創り手」、つくられた物を介して価値を共有できる「使い手」、芸術の成果を広く社会へ発信し、地域に活力を与える「つなぎ手」の育成を目指しており、名作椅子も実際に「使用」しながら教育・研究が行える、特色ある教育環境を整えています。〈芸術文化学部／准教授　渡邉雅志〉



名作椅子は「使う」教材

TOM'S 薬箱 「ワクチンについて」

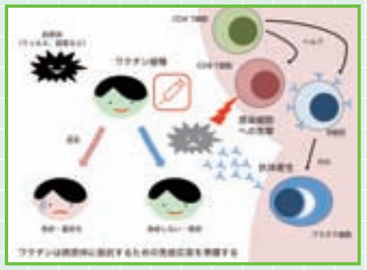
ワクチンは主に感染症の予防に用いられる医薬品で、その語源は「牛」を意味するラテン語からきています。なぜ「牛」なんでしょうか？

ワクチン開発につながる発見をしたのはイギリスの医学者ジェンナー。彼は牛痘にかかった人が天然痘に感染しにくくなる（またはかかっても症状が軽くすむ）事を発見して、これが天然痘ワクチンの開発へとつながりました。ですから「牛」（正確には牝牛で vacca）が語源となりワクチン（vaccine）となったそうです。ちなみに日本語では「ワク・チン」ですが英語では「バク・シーン」に近い発音になります（しかも「シーン」の方にアクセント）。つまり海外では「ワクチン」と言っても全く通じません。

ワクチンは私たち生体が本来持っている身体の病原体に抵抗する仕組み（免疫応答）を利用して、さまざまな感染症に対する抵抗力（免疫記憶）を作らせる医薬品ですが、大きく分けて「生ワクチン」と「不活化ワクチン」の２種類あります。生ワクチンが毒性を弱めた生きたウイルスや細菌などの病原体から作られるのに対して、不活化ワクチンは病原体がもつ特定のタンパク質（抗原と呼びます）から作られます。あくまでも一般論ですが、生ワクチンはほぼ一生効果を持続するものが多いのに対し、不活化ワクチンはある程度の期間を過ぎると効果が無くなってしまう（弱くなってしまう）ので追加のワクチン接種が必要となります。またインフルエンザウイルスなど、タイプによって抗原が変化する病原体に対しては、その年に流行が予想される抗原に対するワクチンを接種します。さて、ワクチンを接種すると私たちの身体の中では何が起こるのでしょうか？

ワクチンを接種すると大きく分けて二つの事が起こります。一つは私たちの身体の中のＢ細胞が病原体に対する抗体（ミサイルみたいなもの）を作る準備をします。もう一つは病原体に感染した細胞を見分けて反応することができるＴ細胞が病原体の事を記憶します。この準備によって本当に感染症を引き起こす病原体が侵入して来た時には、素早く私たちの免疫システムが応答して感染・発症・重症化の阻止に働きます。このように私たちの感染症予防に欠かせないワクチンですが、その他の医薬品と同じように副作用（副反応）もあります。ワクチンが原因といわれている副反応には、主にどんなものがあるのでしょうか？

みなさんも経験があるかもしれませんが、接種した所が痛む・赤くなる、接種後に発熱するなどの軽微な症状をはじめ、最近もあるワクチンについて新聞・テレビ等で報道されているような重大な副反応が見られる事もあります。科学的にはワクチンの副反応は必ずしも接種が原因だとは断定できない場合もあるので注意が必要ですが、以下に副反応の代表的な例を挙げてみます。まず、生ワクチンは病原性（毒性）を弱めてはいるものの、生きたウイルスや細菌を使うため、まれにその病気の症状が出ることがあります。生ワクチンとして接種されていたポリオワクチンですが、予防効果は非常に高いのものの、ワクチン接種によるポリオ発症の恐れもありました（ポリオワクチンは日本でも一昨年９月から人で発病のおそれがない不活化ワクチンに切り替わりました）。またワクチンそのものではなく、ワクチンに含まれる添加剤に対するアレルギー反応や、ワクチンの効果を高めるために含まれるアジュバント（補助剤）によって副反応が出る可能性がある事も知られています。これらの問題はワクチンの安全性や有効性を再認識する良い機会でもあります。一般的にワクチンの副反応が見られる確率は、ワクチンを接種せずに感染症で命を落とす確率に比べて少なく、ワクチンは歴史的にも世界中で多くの感染症から私達を守っています。先人たちの偉業によって生み出された「ワクチン」についてもその他の医薬品と同様、いたずらに副反応（リスク）を怖がるのではなく、ワクチン接種によりもたらされる恩恵（メリット）を理解した確かな情報と判断が必要でしょう。



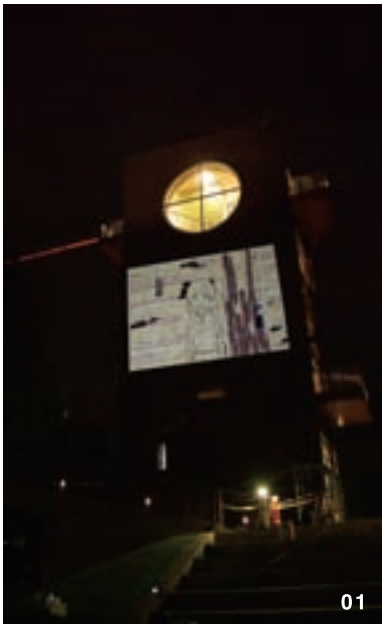
〈和漢医薬学総合研究所／病態生化学分野　准教授　早川芳弘〉

01「秘密基地」種川真章（アニメーション）
アーティストの曲に合わせたアニメーションを制作。多くの市民が足を留めて鑑賞していた。
―展望塔の屋外壁面に上映。

02「生命の源」古田紗也（映像作品）
コンセプトは「生命」。人体に流れる血管も、地球上の水の流れも、生命の源である。
―展望塔内の壁面に上映。

03「エアー○○」本多里帆（映像作品）
壁面から滲み出て表れるものとは…。
―展望塔内の壁面に上映。

04「クモの巣プロジェクト」（公開制作作品）
巨大なクモの巣を1日で公開制作する作品。来場者は作品の中に入って遊ぶことが出来ます。
―昼間の環水公園の様子。作品の制作者たち。


01

02

03

04

TOM'S GALLERY

ナイトミュージアム

富山大学芸術文化学部では、教員・学生の作品を、富山県の代表的な公園である富岩運河環水公園に展示する「GEIBUN オープンエアミュージアム in 環水公園」を平成22年度より開催しています（平成25年度は9月14日～10月13日に開催）。その関連プログラムに「ナイトミュージアム」という企画があります。あえて作品公開の時間を夜に限定し、その暗さを利用した映像プロジェクション作品を1日限定で発表するものです。上映するスクリーンは展望塔内外の壁面を利用し、昼間の公園では見ることができない風景を創りあげます。公園という日常生活の中で作品に触れる機会を提供することにより、普段と違う驚きや楽しさが実感できます。

〈芸術文化学部／准教授　渡邉雅志〉

UNIVERSITY OF TOYAMA 富山大学

左上に配置されている、アルファベットの「T」と「U」をモチーフにしたデザインは、富山大学が、大空・世界を飛翔するイメージを表しています。大きい楕円は国際社会を、小さい楕円は地域を表し、一体となって発展することを表現しているシンボルマークです。そのシンボルマークとともに使用されている、四角は伝統性を示しており、シンボルマークが三次元的にダイナミックに構成されることにより創造性の豊かさを表現しています。

発 行 日：平成26年1月15日
発　　行：国立大学法人　富山大学
編　　集：トムズプレス専門部会
●藤田 安啓　大学院理工学研究部教授
●田村 俊介　人文学部教授
●廣瀬　豊　大学院医学薬学研究部准教授
●渡邉 雅志　芸術文化学部准教授
●早川 芳弘　和漢医薬学総合研究所准教授

問合せ先：富山大学総務部広報グループ
〒930-8555 富山市五福3190
Tel.076-445-6028
Fax.076-445-6063
E-mail　kouhou@u-toyama.ac.jp

http://www.u-toyama.ac.jp

TOM'S PRESSはインターネットでもご覧いただけます。

本誌は、富山大学構内などで無料配布しています。郵送をご希望の方は、住所・氏名・年齢・性別・職業を明記の上、メール又ははがきでお申し込みください。

本誌は、年4回、3ヶ月毎に発行します。ご意見、ご要望を是非お聞かせください。

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。環境保護のため植物油インクを使用しています。

VEGETABLE OIL INK　リサイクル適正Ⓐ

無断転載はご遠慮ください。

印刷・製本　能登印刷株式会社

Cover Story

"つなげる、つながる"

今回のテーマ「つなげる、つながる」の特集内容が企画・プロジェクトの紹介であることから、人と人が手を繋ぐ、協力するということを思いつき、「手」からイメージを広げてみました。記事の一部に子供を取り扱ったものもあり、「手」を連想させるモチーフとして、子供の手のひらに例えられることがある落ち葉を選びました。つながりからちょっとした驚きや笑顔が生まれたらと思います。

芸術文化学部デザイン情報コース2年生
大森真衣、北村彩華